

1990 年度上半期報告書

一橋大学山岳部

1. 八海山

(2/15 夜～2/18) 山内・古田

2/15 大宮 20:54→水上

低気圧の接近により出発を予定より半日遅らす。

2/16(雨のち雪)

水上→八色→里宮

里宮 8:32 発→11:38 霊泉小屋→14:40 ロープウェイ山頂駅付近幕営

天気は当初雨だったが山に登るにつれて湿雪に変わっていった。一週間前の大雨で雪はもう締まって来ているが中途半端で重い。尾根に取り付くまではかなりの急登、木が多い所は登りにくい。ワカンが威力を発揮する。10:05 岳峽山荘、二万五千円には載っていない小屋なので霊泉かと思ったが甘い考えであった。10 人ぐらいは泊まれる。この辺から尾根になる霊泉小屋から 2 時間弱で 1120M 付近、スキー場の音楽が聞こえてくる。ラッセルラッセルでここまで来た我々にとっては嬉しいような腹立たしいような気持ちになる。この辺の尾根は北斜面は中々スパツといているので南斜面づたいに行く。ロープウェイ山頂駅付近に六角堂の作りかけのような物体が立っている。この陰にツェルトを張る。なぜかツェルトはかまぼこ形になった。ちょうどあの五月のコイノボリのような形だったのである。寒い。

2/17 (一日中ガスと雪)

5:00 起床 7:40 出発→9:20 池の峰直下→10:30 女人堂手前→12:06 女人堂付近→14:30 頃薬師岳直下幕営朝起きると外は一面のガス。しばらく様子を見る。7:40 状況は全く変わらないがとりあえず出発。広い尾根だが幸いトレースや赤布がたまにある。池の峰あたりは広過ぎて全然分らない。上へ上へと行くうちに巻くべき山頂(その先は何もない)に来てしまい少々戻ってコースを直す。女人堂手前はなかなかの急登、雪の状態によっては酷そう。そして直下(女人堂の)は岩つぼみ地形に雪庇状の雪壁。ガスあたりの状況が分らず足下も余り良くない気がしたのでこの辺はザイルを出した。山内さんが雪庇状の雪壁を切り崩しながら登って行く。この辺からどこぞの会の連中がスキーを持っていながらひたすら我々のトレースの後をついてくる。女人堂を過ぎ途中斜面が広くなり急登。その後突然樹林がなくなり視界もガスのためゼロ。ここは薬師岳直下、浅草岳というものはないものと思って行動してよい。斜面に苦闘二時間なかなかの雪洞を掘る。ツェルトよりはるかに快適。(女人堂付近帰りのザイルは必要なかった)

2/18(ガスのち晴)

6:40 幕営地発(ガス)→7:15 薬師岳山頂(晴)→八ツ峰直前までピストン→9:00 薬師岳山頂→下山(スキー場上 12:00 ごろ、スキー場下 12:30 ごろ)

朝はガス、天気図によれば晴れる筈と出発。薬師上部はアイゼンを使った。山頂でドンピシャリー気に晴れる。八ツ峰、巻機山方面魚沼平野何でも見えた。ここから先はザイルが必要。薬師の先へは雪庇を飛び降りるようにして降りる。2 段になった雪庇で上 2m 下 10m ぐらい。降りると千本檜

小屋は目と鼻の先、雪はクラストしていてアイゼン要。化け物の様な岩に触れて感激。しかしここを先に行くとなると一体どこをどう行くのか全然判らない。帰りは晴れているので快適。スキーがあればもっと快適であろう。

八海山

試験明けの身体にはややつらい山行となったが、久々の越後の雪山とあって心は晴れた。とは言っても、例年に比べて(昔と比べ)雪は少なく、おまけに初日は雨まで降るといふ異常の中で、新スキー場上までは問題なくこなす。2日目、天候は雪・ガスであったが。我々の武器・篠竹をフルに活用し前進していく。ガスのため距離感はかなりにぶる。御堂の直前で、2ピッチほどザイルを出した他、問題はなく薬師岳手前まで行き、雪洞を掘り、夜を過ごす。(この時点では場所を完全に理解していなかった。)3日目、薬師岳山頂にて天候は回復し、快晴の中千本檜小屋への飛び降りも快適に楽しみ、アイゼンの練習をかねて岩峰帯まで行き、引き返す。前日のルートファインディングの完璧さには感激してしまった。内容的には、初歩的雪山での道具ほぼ全てを使用出来たことが、少雪という条件を上回る満足を与えてくれた。

2. 奥志賀高原山スキー山行

山内(CL)、坪井(SL)、天羽

2月27日快晴○:1日目は坪井、天羽が山スキー初めてと言うこともあり、焼額山スキー場内で基礎練習を行う。本来ならば雪訓(従来の)を行った後が順序だろうが、時間的な理由もありこうなった。ある程度の技術は掴んでくれたと判断。

2月28日快晴○:6:00起床→7:00~10:00雪訓→11:00山頂

前日はやらなかった従来の雪訓を、スキーゲレンデという事実を無視し実行する。やや気分的に緊張感が不足していたことは仕方がない。その後、練習を兼ねて山頂まで登る。予定ではこの日に竜王、野沢方面へ向かう予定であったが、この時パトロール隊から社会的・常識的なストップがかかり我々は現部の状態から判断し(これも至って社会的)下山を覚悟する。計画段階での現地との確認作業と、山へ登る者としての社会的な責任を実感する山行であった。

3. 奥多摩(雲取山)

(坪井、天羽)

3/10歩荷訓練も兼ねていたので、天羽がテント・ブスを持つ。そのため、2人のスピードに大きく差が出る。

3/11荷分けをし直して出発。だらだらと石尾根を歩く。つまらないので歌いながら進む。

4. 越後駒ヶ岳、中の岳、往復

(3/30~4/2) 古田

3/30(晴)

大宮→小出⇒バス⇒大湯温泉 11:40 発→12:30 駒の湯→13:25 646m 地点(一度登山口付近まで戻る、所要 55 分)645m 付近 14:35 出発→916m 地点 15:40

南風で暖かい。登山口から吊橋を渡って尾根に取り付く、646m 付近で一本取って場所を確認しようとして地図が無いことに気付く。登山口で広げたからあの辺にあるのだろうと空身で戻る。いきなり大失敗、地図はやはり登山口付近に落ちていた。標高差 300m を走ってピストンはつらい。646m から上は雪洞を掘れそうなどが多い。結局 916m で雪洞を掘る。横穴式は面倒なので縦穴式にツェルトをかぶせる。夜は快晴、月明かりに駒が浮かびあがる。

3/31(曇のち雨)

4:00 起床 5:30 出発→6:30 ニセ小倉山頂→7:00 小倉山→8:40 1763m 付近→9:15 駒の小屋(駒アタック所要 30 分)

夜中、屋根にしていたツェルトが飛びそうな程の風が吹いたため今日は一面雲、とはいえガスがないのは有難い。ニセ小倉直下の急登は結構クレヴァスみたいな割れ目が雪面にやたらあるので気分が悪い。とにかく雪庇・クレヴァス・雪崩がこの山域の全てという感じ。ニセ小倉山頂付近幕営に良い。小倉山山頂から先は広い山スキーにも良さそう。駒の小屋直下の急登だけはアイゼンがあった方が良かったかも知れない。9:15 小屋着、雨が降り始めているので今日はここまでにして視界の効くうちに駒ピストン。天候は急激に悪化、暴風雨となる。駒の小屋は大変快適。

4/1(ガス)

4:00 起床 5:15 出発→6:30 天狗平→7:25 檜廊下付近→9:00 中の岳直下→9:35 中の岳避難小屋 10:15 発→11:20 檜廊下付近→13:10 駒の小屋

今日は朝から激しいガスどうしようかと迷いながら結局出発、地図とコンパスが威力を発揮する。十二平から先はうっかりするとクシガハナの方へ下りてしまうので注意。1933m をすぎたあたりからハイマツが現れやせた尾根になり足をとられ易いのでワカンが脱ぐ。天狗平の後、方向が変わるあたりからクレヴァス地獄。雪庇の上は楽だが水無川側に行くべきだろう。とにかく気は抜けない。雪庇の大きさも半端じゃない。そんなのがやたらに落ちているからコワイ。中の岳辺りで完全にホワイトアウト。コンパスを使いながら上へ上へと進み小屋にぶつかりほっと一息。紅茶を作って一休み。小屋に帰った時は生きて帰れたと本気で思った。16:00 頃ガスが晴れた。駒にまた登る。中の岳、オカメ、八海と絶景。

4/2(晴) 3:50 起床→4:50 出発→6:50 登山口

気温の上がらぬうちにニセ小倉の斜面を下るため早出。春山だけあって帰りは速い。大湯で朝風呂に入って帰途につく。

5. 谷川連峰縦走

4/21 土合→西黒尾根→谷川岳→蓬峠→清水峠→白毛門→土合 (坪井、天羽)

天気 (雨)

6:00 土合駅を出発。次の日の予報も雨だったので、とりあえず行ってみる。途中で駅に篠竹を忘れてきたことに気付くが2人とも戻る気力がない。登るにつれて雨から雪になり、完全にホワイ

ト一色の世界になる。

12:00 引き返す。

6. ゴールデンウィーク山行・越後荒沢岳—中ノ岳—八海山

メンバー：山内(C.L)、坪井(S.L)、天羽、古田

4月28日：湯沢⇒浦佐⇒銀山平⇒前嶺⇒幕営地 17:00

晴（マーク）

雪は少ない。この事は2月の八海山で理解していたが再度思い知った。前嶺では計3ピッチザイルを出すのが、途中ルートを見失った他はこれといった問題はなかった。やはりこの時期夏道行くには半ば苦勞する。

4月29日：幕営地⇒荒沢岳⇒兎岳⇒中ノ岳避難小屋 16:00

雪（マーク）風強し

この日は天候判断のミスで行動日となってしまったが、全員が体力限界まで使いつくすことでなんとか中ノ岳まで至る。兎岳山頂附近にてリーダーの頭の中には丹後山小屋避難の発想があったが、全体的に風が弱体化してきたことにより前進することにした。しかし、思うように弱まらず、猛吹雪の中何時間も行動することになった。途中、天羽が雪ピを踏みぬき一瞬ヒヤツとする場面もあり、この日の行動には反省が求められる。雪の状態は湿雪の中、非常に悪かった。

4月30日：中ノ岳避難小屋⇒十字峽

くもり(マーク)

前日の湿雪と夜間の放射冷却によりアイゼンが必要となるほど、アイスバーン化した。予定では“おかめのぞき”を通過し八海山へ行くことになっていたが、このメンバーでの通過は危険と判断し下山することにする。これは計画段階での詰めの弱さと雪の状態が原因である。ちなみに、この山行は一橋大学山岳部としてではなく、一個人的グループとしての登山であった。ただし、これは直接関係することではないが、一抹の心理的背景になっていたことは確かである。

7. 水根沢

6月3日（古田・天羽）

<天気>晴

行きはバスから女子高生に声をかけられ、帰りはワサビを取ってきて、とても楽しかった。

8. 6、7、8月の活動について、

近年の部員不足の中、伝統的な技術の伝承が非常に困難になってきた。これを構造的な問題と受け止め、活動内容にも自ずと制約がつく。

この様な認識の下で、学校側と話し合った結果、今夏までを一つの実験期間とし、その間部員を募集し、やる気のある人間がどれほど存在するのかを確認することとなった。仮に、技術伝承が行えないような構成メンバーになれば、改めてその現実に適合した新たな登山様式に移行しなけ

ればならない。しかし、様式が変わろうと、登山である限り基本的姿勢は変わるものであってはいけない。あくまで安全な登山を行うための新様式でなければならない。

9. 氷川屏風・水根沢

6月9日 天羽、田形、古田

10. 海沢

6月10日 山内、天羽、古田、田形

くもりのち晴(マーク)

新人田形を加え、快適な沢であった。

前日に、天羽・古田と3人で水根沢へ出かけたが、この沢は自分にとっては水根沢よりも難しく感じられた。何が難しいかと言うと、釜がなかなか深い所があったと言う点である。また、ザイルを張ってトラバースする所があったが、なかなか高度感があり、自分にとってはスリルが味わえた。この場所では、自分がヘタクソでなかなか前に進まなかったのの後から来たパーティーをずい分待たせてしまうことになった。沢における実践的ザイルワークの習得が、未だなっていなかった。

(文責 田形)

11. 丹波川本流～一の瀬川～大常木谷

(6/15 夕～6/17) 山内・天羽・古田

6/15 ヒッチで三条新橋へ

6/16 寒い。手取淵は最初左岸、途中右岸にホールドを見つけて飛びつく。右岸は滑りやすくへつりもシビア、胴木滝は適当に泳いで流木に登り左岸寄りに通過、意外にあっけない沢で3hぐらいでおいらん淵に到着し第一ラウンド終了。一度車道に上がって腹ごしらえをする。一の瀬川への下降路は青梅街道の橋の塩山側にある。一の瀬川については遡行図はない。しばらく平凡な流れを行くと突然ゴルジュがどーんと現れる。古き紀行文ではこの辺には「通らず」がやたらにあるように書いてあるものが今やそんなものは全然ない。とはいえ長い淵の泳ぎなかなか充実して楽しめる。天候はいきなり雷雨となりどんどん過激な山行になっていく。1.5～2hほどで大常木谷出合。大常木谷は雨の中を進む。滝はどれも易しい。千苦の滝はなかなかの滝である。釜は浅く落ちたらただ事では済まぬので高巻く。この先の倒木帯附近はビバーク予定地であったということもあってまだ時間は早い。今日の行程を終え、たき火と釣に分かれる。釣に行った2人は一体何をしに行っていたのか、晩飯は米とミソであった。5:30 ごろ突然雷雨。よせばいいのにあわててシュラフカバーにもぐりこむ。これで一晩濡れたシュラフカバーで寝るはめになる。

6/17 今朝は天気は良いが冷やってくる。最初がいきなり山女魚淵。水に浸かるのは腹までというのは大ウソ。朝っぱらから泳がされる。早川淵も易しい。すだれ状滝、不動の滝のどちらも簡単へつりでとりつける。不動の滝もホールドがしっかりしている。左から登る。全所小屋あとのゴーロはいやになるほど長い。積石滝は右側を登ったがシュリングなどがついていて登り易い。その大

岩は素直に右岸をまこう。側壁に登ろうとしてはまった人が約一名いた。この後頻繁に沢が分かれガレの詰めで終わる。ビバーク地を出発して 4 時間、10 時頃に縦走路に出る。12:30~13:00 ごろ丹波着。

12. 雪上訓練合宿(北岳大樺沢)

山内・天羽・古田・田形

6 月 23 日快晴(マーク) 甲府→タクシー→広河原→大樺沢上部→白根御池 幕営

新人(去年一度入部していたが)田形を加え、今年度初の雪訓を行う。田形は結局、大樺沢の登りでバテてしまい上部での雪訓において、倒れてしまう。上級生の雪訓となってしまう。

6 月 24 日快晴(マーク) 幕営地→大樺沢(雪訓)→八本歯のコル→北岳→右俣(14:00)→広河原
この日は、前日のダラケをとり戻すために気合をいれる。内容的には一応の技術訓練は出来たので、満足行くものとなる。下山時における搬送をもっといねいにやった方が良かった感もあるが、一応成功といえる。

<雪訓感想>

雪訓は自分にとって初めての本格的な山登りになった。そのため、体力不足がたり、大樺沢を登り始める時には、もうバテ始めていた。だから、大樺沢の雪渓をキックステップで登るのが非常につらかった。途中からは三步ほど進むと、息切れがして、立ち止まる有様だった。そのため、全体のペースを遅らせることになり、他の部員の皆様には非常に迷惑をかけた。当初の予定では、その日に雪訓をする予定であったが、自分はバテていてほとんどできなかった。次の日には、キックステップ、滑落停止などを行ったが、完全に身につけるまでには至らなかった。そして、北岳への登り降りでは、スタンディング・アックス・ビレーやスタカットなどの技術を修得した。しかし、所々に、うろ覚えな所があり、山内さんに叱られもした。北岳という日本第二位の高峰に登れたことや、他の部員の皆様が作ってくれた夕食をおいしく食べられたことには非常に感激したが、自分にとっては多くの課題が残った山行であった。

(文責 田形)

13. 水根沢遡行

7 月 4 日

参加メンバー:山内・田形・又賀 立川駅~白丸駅~水根沢~奥多摩駅

今回の遡行の目的は、主に又賀の沢への入門にあったと思われる。水根沢は、その意味でも適当な沢の一つであろう。遡行自体は 2 時間程度で終わったが、さして危険もなく充実した沢登りになった。ただ、途中で高巻きから沢へ降りる時に懸垂下降を行ったが又賀には初めての体験でなかなか恐怖を感じていたようだ。沢登りだけではなく、アプローチの時にヒッチハイクをしたことも、田形・又賀の両名にとっては貴重な(?)経験となったことだろう。

(文責 田形)

14. 鳩の巣溪谷徒渉トレーニング

(7/8) 天羽・又賀・古田

夏合宿の双六谷に備えて水流の多い所でザイルを用いた徒渉技術を練習しようということにする。場所はこの辺の沢ではいまいち迫力がないので多摩川中流部の瀬などを利用ということでここを選定。ハーケン打ち、ボルト打ち、激流に対峙しての徒渉、ザイルを用いての徒渉と、流された場合の回収方法を重点にやり、川井から鳩の巣までを遡行溯行。水線ぎりぎりに行こうと思うと結構シビアなへつりがあったりして面白い。

5:37 立川発(青梅線)～6:30 頃川井着～以下徒歩

7:00 頃、遡行開始、実際は遡行というより徒渉の練習となった。1～2時間歩いた後、適当な大きさの岩があったので、ハーケン・ボルト打ちの練習を行った。ハーケン打ちでは、クラックの観察、打ち込み方に気を付けて練習した。ボルト打ちは、結構時間がかかった。その後、対岸へ渡り、ザイルワークを用いての徒渉の練習を行った。先ず最初は、流れの弱い場所で、出発点と目標地点に確保者を置いて徒渉を行った。その後、激流の中で徒渉を行い、一人用、二人用それぞれの方法を練習した。ザイルワークを用いての練習も行ったが、川下にいる人間がザイルを引きよせるタイミング等、このトレーニングの中では、難しい所があった。これが終わり、昼食をとった後、鳩ノ巣溪谷までへつりの練習をした。練習には適した場所であった。

14:00 頃終了。

(by又賀)

15. 一の瀬川(大常木谷出合まで)および小室川谷

(7月17日午後～18日) 古田

7/17 試験が終わると大急ぎで電車で飛びのる。ヒッチを重ねて6:00PM 一の瀬川にかかる橋についた。沢を30分ほど行ってビバーク。

7/18 朝とはいえもうそれほど寒くはない。今回は小室川谷をやる前にウォーミングアップのつもりでと、また、遡行図を書いてみたくてこの沢に入ったが、遡行図用のノートを流されてしまうし惨々。大常木沢出合まで難なく進み右岸を登り林道に出る。林道を小一時間で三条新橋、当初予定していた泉水本流は時間の関係からあきらめしばらく林道を行ってから本流におりる。本流も変化に富んで面白そうだった。小室川谷は面白い、ムチャクチャ面白い、かなり泳がされるし、沢自体彫刻刀でムチャクチャにえぐった様なゴルジュ、滝も大体登れる。小室の淵の出口の滝はどうも登り方がわからず断念。中盤は30X50のナメが途中で釜を持っていたりして素晴らしい。だが、**ジャマケ沢**と分けた後はつまらないし長い。遡行図はあてにならない。ひたすら水を追いかけるとヤブもなくスポッと稜線に出る。大菩薩の風は草原をなびかせて最高であった。

16. 大源太川北沢本谷、湯檜曾川本谷

(古田・天羽・又賀)

7/20<天気>快晴

(上野 17:27→大宮 17:54→岩場スキー場駅→旭原、ビバーク地 21:00)

岩原駅から旭原まで意外と人家がある。地図にない新しい道に不安を感じながらも真っすぐ行くと旭原に着く。途中流量も見えたし蛍もいてなかなか良かった。テニスコートの芝地でビバーク。水道もジュースの自動販売機も有。

21 日<天気>快晴—晴

(起床 4:30—出発 5:30→大源太山 16:00→蓬峠 19:30)

三俣まではコースタイム通り・順調に進む。大滝 20mは楽に巻けそうに見えて実は難しい。ここが悪運のつき始め。チムニーはザックがつかえたので荷揚げ。3 段 15m 辺りから水が激しくなりだし、10m はスラブ状になっていた。ここの巻きでザックを落としたり、ブッシュからなかなか出られないなどのハプニングが続出。腕力・気力とも使い果たし、残りのスラブはペースが落ちる。大源太山からの道は踏跡があるものの、ヤブこぎで疲れる。すでに又賀が果て、暗くなってからやっと蓬峠のテント場に着く。

22 日<天気>晴→曇

(起床 5:00→出発 6:00→出合 7:40→本谷 8:00→十字峡→大滝上→ビバーク地 18:30)

今日も天気が良い。古田と天羽は飛び込んで泳ぐ。又賀はひたすら乾パンを食う。どうも進みが遅い。すごいナメ滝を通過し十字峡に着いた時点でもう 12:00。明らかに二俣まで行けないので引き返す相談をするが結局進む。きれいな釜が続く、来て良かったと思いながら進むが甘かった。シャワーライミングでずぶ濡れになった後、待っていたのは 40m の大滝。悪戦苦闘し、天羽のザイル操作のまずさもあり、滝の上に着いたのは、すでに 18:00。ビバーク地を探す。その対岸の道の上で寝る。蚊に刺されながら、なかなかつかないたき火を待つ。古田は息を吹こうと腹に力を入れては、後からおならを出すので、あれでは火がつかない。

23 日<天気>晴ときどき曇

(起床 4:00→出発 5:00→二俣 5:50→朝日岳 8:20→○出 9:00→土合 14:30)

朝日岳まで楽に着く。トンボが多い。その後が長かった。

この小縦走は自分にとって、初めての本格的な山行であった。初日の沢登りは、大自然の中で楽しみながら登ることができたものの、山頂付近のスラブを登りきった後、尾根に出たときは、疲労は限界に達してしまった。この段階で、かなり予定時間をオーバーして、他のメンバーに迷惑をかけてしまったのだが、大源太山を越え、次の山頂を越す手前では完全にバテてしまい、ザックを持ってもらったりしてなんとか、ビバーク地まで行くことができた。初日にして、山登りの厳しさを思い知らされ、コンスタントなランニングなどのトレーニングの重要性を改めて感じた。二日目は、出合まで行ったところで沢登りを開始した。途中、多めに休みをとってくれたおかげで、あまりバテずにすんだ。この日は、8m の滝の直登など自分にとっては、実力以上の難関があったが、2 人のおかげで無事クリア出来たりして、結構感動した。この日は、目標地点の二俣まで行けなかった。三日目は山頂に登ったあと、縦走して、この山を下山すれば土合だという所で、今度は足の痛みのた

めバテてしまい、再び古田君に助けてもらい、のろのろ歩いたりして、連日予定を遅らせたことは申し訳なく思う。そして、食事なども、自分は、余り手伝うことが出来ず、ほとんど 2 人にしてもらったり、2 度もザックを持ってもらったり……と、反省点をあげればきりが無い。これからも、山行を積んで山に慣れていきたいと思う。

(文責: 又賀)

17. 万太郎本谷・谷川岳

山内、田形

7月28日: 土樽→一ノ滝上部 15:00→幕営地

快晴のちくもり(マーク)

美しい沢だった。下流域のナメは実にいいものだ。しかし、谷が上流に行くに従い狭まり沢らしくなると、この時期、この地域特有の鉄砲水が恐くなる。時間との兼ね合い。上流における不気味な雰囲気により、一ノ滝においてトップ山内はノービレーで登ってしまった。

7月29日: 幕営地 6:00→2ノ滝→3ノ滝→谷川岳肩の小屋 11:20

3ノ滝で2ピッチの登りを終えともう源流らしくなる。途中、左俣に入ってしまったが、たいした時間のロスもなく、谷川岳へ至る。いい沢だった。一ノ倉岳附近で田形が足の痛みを訴えたので、夏合宿のこともあり茂倉新道で土樽へ下山。

土樽駅から万太郎谷出合までの歩きが自分にとってはかなりきつく思われた。しかし、沢に入ると、涼しさのためか、いくぶん気持ち楽になった。この分では、縦走的な歩きがいやになり、沢の方が好きになるかも知れない。一ノ滝、三ノ滝ではザイルを使ってセカンドで直登したわけだが、何度か体重がザイルにかかってしまう事態におちいり、難渋した。自分の技術の未熟さを感じた。夕食には山内さんが用意したラーメンライスを食べ満足！しかし、寝る時に、寝袋の足の部分がツェルトから外にはみ出し、朝起きた時に、足が冷たくなっていたのは自分の不注意だった。また沢をつめ、縦走になったとたんに、片足に鈍痛が走って予定が狂ったことも反省すべきだ。

(文責: 田形)

18. 夏合宿(前半)

8/2~10

(山内・古田・天羽・田形)

2日<天気>晴 (駅出発 5:00—(タクシー)—車止め 5:55—小倉谷出合橋 8:40 打込谷手前 15:15)

最高の天気の中、出発する。最初の林道から田形が遅れる。なぜかこの日が沢の中で一番大変であった。

3日<天気>晴 (〇起 4:30 〇出 5:30—打込谷出合 5:35—下抜戸広河原 10:15—蓮華谷出合 13:50)

本日が双六谷のメインと思っていたがキンチヂミはチヂムどころかたるんでしまうような所だった。何と言っても、この日のニュースはビバーク地に着いてから、田形が消えたことである。

4日<天気>晴 (○起 4:00○出 5:00—九郎右衛門谷出合 5:50—滝上 8:00—五郎平 10:25—黒部源流 13:00)

イワナがたくさんいたのだが全く相手にしてもらえなかった。

5日<天気>晴 (○起 4:00○出 4:55—雲の平 7:50—高天原 10:45—温泉マーク 11:30—岩苔小谷—黒部川 14:00—立石奇岩 16:00)

谷間から、雲の平に出て視界が広がり、気分が良い。温泉も最高だった。ただし、温泉に入ったせいか、その後疲れがどっと出てしまった。

6日<天気>曇一時にわか雨 (○起 4:00○出 5:15 薬師沢出合 8:15—赤木沢出合 9:30—大滝 11:40—太郎平小屋 15:15—薬師峠 16:00)

最後の沢となった赤木沢を抜け、みんなで靴を書き換えている途中で雨が降り出した。雷が鳴っていたので、少し上でしばらく待機。ここまでは大変天候に恵まれた。

7日<天気>晴 (○起 3:30○出 4:40—五色小屋 5:00—一ノ越 8:20—立山雄山 9:20—剣沢 12:00) やっと着いた。

9日<天気>曇のち雨

本日、休息日。

(山内)近場の散歩 (古田)大日岳 (天羽)奥大日岳(田形)テントにしがみついで離れなかった

10日<天気>暴風雨

台風がやって来たので、すごい雨だった。人間は雨でぐしょぐしょに濡れて体中がふやけても眠れることが分る。

19. 夏合宿後半: 剣岳・細野伸二君追悼山行

8月11日 キリ 剣沢→室堂→剣沢

夏合宿前半を無事に終え、細野家と室堂にて落ち合う。その他石部長、西牟田、斉藤、井上 OB、坪井、又賀も参加し、剣沢キャンプ場にて談笑する。

8月12日 晴 ①剣沢→平蔵谷現場手前→剣沢→室堂

② 剣沢→本峰→剣沢

③ 剣沢→室堂

① 細野克宏、亜紀子、西牟田、斉藤、井上、山内

② 坪井、古田、天羽、田形、又賀

③ 山内他部員と細野家両氏

1988 年夏遭難した細野伸二君の追悼で平蔵谷に向かうが、寡雪ということもあり途中クレバスが形成されて、結局現場までは全員行けなくなる。改めて夏の雪渓処理の難しさを知り、2 度とこの様な事故は起こしてはならぬと心に決める。また、夏であれ必要な時はアイゼンを使用し安全度を高めることが求められる。本当の意味で、各自が人生、登山生活の意味を考えねばならない。